

## オスティア：広大な考古学領域の管理

アンジェロ・ペッレグリーノ Angelo Pellegrino

古代オスティアの遺跡を含むオスティアの考古学領域は、約 80 ヘクタールに相当する極めて広い面積に広がっている。このうち、光がもたらされた遺跡の一部は 35 ヘクタールにあたる。このため、広大な古代遺跡を管理することは、単なる比較例としてあげるならば、大体ポンペイの広さと同様だが、難しい問題が多い。換言するならば、死の都市、しかし、実際には生きている都市と同じ諸々の要求が生じる都市において、活動を組織する必要がある。たとえば、ある壁が崩れたならば元に戻さなければならない、あるフレスコ画が傷んだら修復しなければならない、あるモザイクが壊れてきたならせめてその表面を修復しなければならない、道が断絶したら相応しい舗石で補強しなければならない、、、。明らかに、これらすべての作業は、現代の居住区で行われる方法に比べて難易度がきわめて高く、何より古代の様々な手工業にかかわる元来の設備を備えたスタジオで、さらには細心の注意を払って行われる。もっといえば、このような状況下で、作業にあたるスタッフも、保存と価値の維持に専念しつつ、行政の業務関係にも従事しなければならない、まさに事務所と作業所における仕事を両立しなければならない。彼らの数は、130 名相当だが、見合う出資額の不足に加え、いつもかなり腰の重い政府の官庁機構をも含まざるを得ず、これらすべての活動を調整する複雑さが、ご理解いただけるだろう。

考古学遺跡は、専用の金属製の囲いで守られており、そこには 3 つの格子門が付いている。3 つのうち 2 つは、通常閉鎖されており、特別な必要が生じた時にのみ開かれる。一方、残る最後の 1 つは、旅行客や事務所のスタッフが通る主な入口、通称「ポルタ・ロマーナ（ローマ門）」となっている。

考古学区域は、キケロによって建てられた壁に囲まれたオスティアの都市（組織）、古代の海岸近くに位置したポルタ・マリーナ（海洋門）外側の近郊区域、そしてポルタ・ロマーナ（ローマ門）のネクロポリスによって形成されている。

考古学区域は、主要な記念建造物と都市全体を内包しており、その大半が一般公開されている。旅行客が通常辿るコースに沿ってざっと列挙すると、デクマヌス・マクスィムス（日本の考古学者たちがこの上で作業を行った）、キシアリウスの浴場、ネプテュヌスの浴場、劇場、コルポラツィオーニ（商人組合）広場、フォルトゥナ・アンノーナの家、ディアナの家、テルモポリウム（居酒屋）、フォルム、カピトリウム、フォルムの浴場、魚売りのタベルナ（魚屋）、デクマヌスの最後の道程、絵画のある家の集合体、御者たちの共同住宅、七賢人の浴場、セラピスの共同住宅となる。これに対し、わずかな見学者だけが到達するのがポルタ・マリーナの近郊区域で、カルティリウス・ポプリコラの墓、諸浴場、シナゴークなどを訪れながら、さらに少ない見学者がその他のより周辺区域に赴く。

しかし、オスティア遺跡は古代遺跡だけでなく、現代の建物も含む複合体である。後者の中では、保護と価値の維持にかかわる全く別の活動を行う。ここで簡潔に列挙すると以下の通りであ

る。古代都市とその領域で行われた調査に伴い発見された古代の出土品を保存するための保管、行政上の所長や秘書およびスタッフの事務所（14世紀の建物、通称“塩の大型共同住宅”内に大体収容されている）、写真撮影のラボラトリー、年代ものの写真も保管された写真資料室、前世紀の重要な図版資料も保管されている図版資料室、オステアにかかわる文献、いくつかは19世紀に遡る歴史的な価値があるものも有する図書館、修復のラボラトリー、大工の仕事場、作業員の脱衣所、警備のスタッフによって管理された、テレビカメラの映像を通して考古学区域を視覚的にコントロールする作業室。

考古学区域で作業する考古学者や建築家の主な課題は、明らかに、何よりもその一部を成す古代建造物の物理的保護を保証することである。特殊で精密な保護処理は、壁面と、もしもあるならば空間を美しく飾っていた装飾に向けられるべきである。明らかに、オステアのように広大な状況では、このような作業を展開することは極めて困難である。なぜなら通常必要不可欠な基本的作業、「常時維持管理」を行うことが不可能だからだ。このことは、内部の作業スタッフや修復士が足りないために生ずる。このような目的のためには、少なくとも30名の作業員と10名の修復士が必要だろうが、我々の職員では、ただ1名の作業員（さらには健康状態が思わしくない）と修復士しかいない。このため、文化財監督局 *Soprintendenza* の内部職員によってこれらの作業が展開されると、外部の会社に請負に出され、僅かな財政源のため1年に数カ月だけ、たった1つの建物あるいは装飾の集合体に集中して作業が行われる。

建物の壁面に関する主要問題の1つは、緑の侵害で、オステアのような湿地帯ではとりわけ緑は繁茂する。実際、普通に生えているセイヨウキツタやイチジクの木などが、わずかに数年で壁の外壁の間に入り込み、数か所では、壁面構造の表面部分を砕きながら、しばしば縦に走る大亀裂をも作りながらその全面を覆ってしまう。このため、自生し、はびこる植物を除去する対策が、できれば定期的に、行われる必要がある。なぜなら、まず記念建造物を見学者たちから覆い隠してしまうからであり、次に建造物に深刻な被害を与えるからである。したがって、毎年我々の主な業務は草刈りとなっており、財政不足のため1年に2回だけ間をとって行われるだろうが、前世紀の終わりまでは、より多い資金のために、4回でさえ行われた。財政難により、このような作業が、主な見学コースであるデクマヌス・マクシムスからポルタ・マリーナまでと、それに面した建物に集中せざるを得ないことは、簡単に予測できるだろう。

同様な保存上の問題は、フレスコ画にもあてはまる。それらも植物によって害されやすいからである。しかし、フレスコ画にとって一番の大敵は湿気で、湿気が原因で起こる塩の上昇によって、絵画の薄膜がはがれてしまう。気候の変化もまたフレスコ画によくない。このため、フレスコ画の表面をたとえ簡単にではあっても定期的に洗浄できない場合、フレスコ画を守る唯一の方法は、壁面からはがし、アルミニウム製の骨組をした軽い台に収め、それを元の場所、倉庫、あるいは博物館内に置くかしかない。この種の処置は、もちろん、理論的にも方法論的にも推奨されるべきではない。しかし壁からはがすことは、壁画全体を保護する唯一の方法なのである。実際、オステアで保存されている二つとない壁画の数々は、壁面からかつてはがされたものばかりである。これらの絵画は、このような処置によってのみ（すでに述べたように、方法論的側面からは議論の余地が残っているかもしれない）ともかくもポンペイ以後のローマ絵画世界におけるも

っとも重要な絵画群の代表ならしめている。

モザイクについても、相応しい保存を保障することは、ことのほか難しい。それらは実際、湿気、水や霜の浸透によって被害をこうむる可能性がある。これらの要素は、個別にも、複合的にも、しばしば、土台からのモザイク・テッセラの剥離を引き起こす。このため、また見学者たちの目に触れて残念ながら取り去られてしまうケースに備えるためにも、大気の諸要因から守るような、繊維やポズラン（火山灰）、その他何も生えない材料によってモザイクを覆った方がよい。その他に、昔なされた修復が、モザイクの表面に被害をもたらすことがある。モザイクを出土場所からはがし、鉄格子がついたセメントの層の上に設置する修復で、この場合、金属の酸化過程が金属を錆びさせ、文字通りモザイクのテッセラを吹き飛ばしてしまうのである。これについては、近年、コルポラツィオーニ（商人組合）広場のいくつかのモザイクが、設置されていたセメントと鉄でできた層から時間と手間のかかる作業によってはがされ、オリジナルの土台に似た別の層に処理された。

オスティア遺跡を訪れる旅行者はかなり多く、その古代都市がローマ時代に、最盛期ですら 5 万人を超さない住人を受容すべく計画されたことを考慮すると、毎年 30 万人の見学者が、あらゆる分野で記号論理学的問題を生み出すことがわかる。絶えず触れられ／踏まれることによる古代建造物の消耗、野蛮な行為、同様な旅行者たちが起こすかもしれない危険、遺跡および現代建造物の清掃（トイレ、博物館、レストラン、売店）などがあげられる。見学者の人数制限はできないため、彼らの身の安全をはかるため、より危険な区域は一般に公開しない対策が必要となる。その場所とは、穴があるところ、高低差、壁などの落差があるところである。これに対し、反対に、モザイクや壁画の装飾を保存することを保障するためには、週に 1 回のみ、または守衛部がその場所に付き添い見学者に公開する形で、きわめて重要な建造物は閉鎖されることになった。これについては、「庭の家 Case Giardino」の名で知られる、近年修復されたばかりのフレスコ画を有する家の集合体において実現した。

このように広大で重要な区域、さらにポンペイ以後の（ローマ）世界の絵画やモザイクのきわめて重要な遺産が保存されている区域は、それに相応しい形で保護され、守られるべきである。このため、遺跡および博物館は、朝・昼・晩と絶えず約 50 名の監視員によって監視されている。しかしながら、その数は全く足りないことを強調する必要がある。このように広大な考古学遺跡では、一回につき 4～5 部隊程度のパトロールが実際には適当である。約 20 年前は警備員の総数は約 2 倍だったのです！

このため、警報装置および最重要箇所にテレビカメラを据えた網の囲いを設置することが決められた。これらは警備員の作業室の技術システムとつながっており、この部屋で実際に遺跡のもっとも重要な場所をコントロールする。

このように広大で訪れる人の多い区域の管理は、行政面でも、実践と活動の面でも、非常に複雑であるため、現行の規則（市民法 Codice Urbani, D.L. n.42/04）によるいくつかの重要な勤務は外部の委託することができる。オスティアでは、民間団体を再組織して下記の勤務にあたらせている：

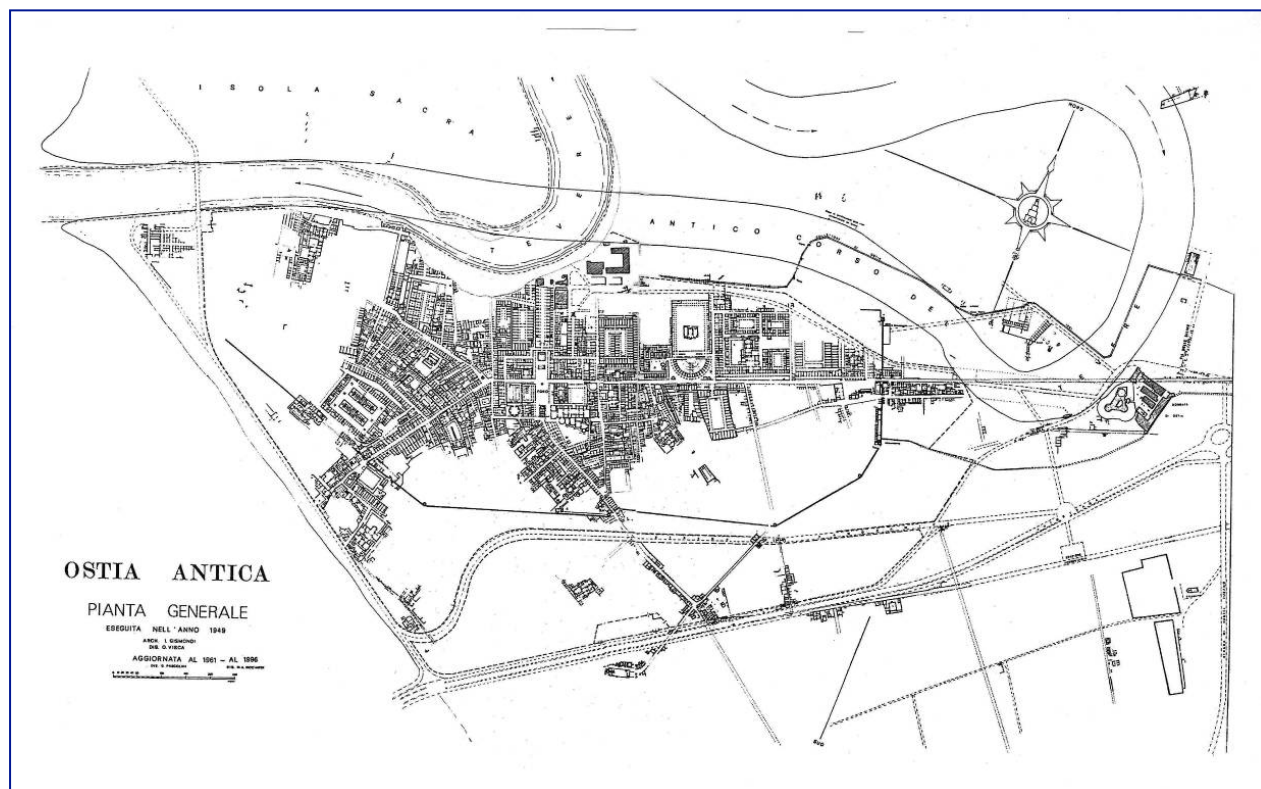
a) 修復業務

- b) 売店、出版業、チケット売り場、教育、ガイド付き見学業務
- c) パーキング管理業務
- d) 展覧会や文化的イベントの組織業務

このような業務信託の委託を委託された会社は、1年間の使用料と、利益のあるパーセンテージを直接文化財監督局（ローマやオスティアの遺跡を、ポンペイの遺跡と同様に、特別な研究所と同様に形成）に支払う。この総額は保護活動の唯一の収益として配分される。

ともかく、このような形式の融資では、監督局員が通常政府から受け取るバジェットを上回り、相応しくない。

(藤井慈子訳)





*Ostia Antica, Teatro e Piazzale delle Corporazioni*





*Ostia Antica, Thermpolium*

